

3567 地球のかおり 「紅雲の曙」(産経新聞)：状況と心模様

中国黄山。今回は条件に恵まれていた。何よりも時間の余裕が有難い。
12月から1月、心の余裕にもなる。好天気。新年を黄山で迎えるとは、何と幸せなことか。
黄山は厳しい立地にある。移動が難しい僻地。しかも山の中。
中国の案内人が解放してくれた。自由に動けるのが何よりも有難い。

今回は、いろいろ事前に目標を持っていた。黄山景勝区は広大で、奇峰奇岩。
尖った峰は絵になるが、妨げにもなる。概要を早く把握したい。
定点観測という側面も楽しい。日々、どのように見えるか、変わるか、光と影。
不変なのか、楽しみである。

和紙夢絵に挑戦して以来、山水画の世界を、作品にしたいという思いは念願の一つだった。
中国での感動のシーンに出会いたい。モチーフ収集は、執念。そんな思いもあって、
今回は、中国黄山を選択している。出会いをワクワクして待っている状況。

今日も真夜中の午前3時にスタート。雲海と日の出を目撃したかった。
しかも、パーフェクトな光景。常に、スマイルオンミー、とはいかない。
これがなかなか難しい。何日もベストポジションを求めて、探し歩いた。
そして、眼前の場所を見つけた。夜明け前は、墨をこぼしたような真っ暗。まさに
一寸先が見えない状況。ある種の恐怖は、いつも感じる。
冒険家、海外一人旅ではなおさら。もし確かなものがあるとしたら、積み重ねた自分自身。

黄山は、ある意味で危険地帯の領域。足でも滑らせ谷底に落ちれば、行方不明。
今回は、現地での下調べ、ロケハンティングは、念入りにした。自己責任の自己防衛。
まず、相手側の山の概要把握。奇峰の石の強弱、寒さや足元の堅牢さ。
時には草で足元が滑ることにも。寒さで道が凍り、滑り易くもなっている。
早朝で足元も暗い。時には闇の日もあった。十二分に注意を払っても不十分。
体験上、一番頼りになるのは、勘と直感。ただし、心の平常心が条件。
そんなはずでなかったは、通用しない。

たかが、中国黄山と片付けられない。予測できないことが次々と発生。
朝は、東から日が昇る。順光である。西の方角はすっきり見える。
朝の東方向は逆光。これもまた面白い。
我が身のベストなポジションが確保できたら、仕事の半分が終わる。
自然は待ってくれない。微笑みは瞬き。偶然や運という言葉で片付けるしかない。
周囲を見渡した。後方の今いる場所が目に入った。

山は尖った鋭角の峰。どうしたらたどり着けるか。その頂^{いただき}から、どのように見えるのか。
そのポジションにたどり着きたいという思い。知恵を絞って行ける場所なのか。
無踏の峰なのか。道があるかもしれない。ロケハンを、翌日、即実践。
奇峰、奇岩、奇松。全体像が見えてくる。広大。予想を超える。
鋭角の峰々は、連山でなく、それぞれ独立しているように見える。
眼前に見えて、たどり着けない。
尖った峰に比例して、他にも深い。そして、天候も左右する。自然の様相は、毎日違う。
これにはさからえない。運が左右する。そして、冷静な状況判断。

耐久力には自信もあった。健脚と思い込んでいた。訓練もしていた。
今までの体験が役立たない。黄山は、それ以上。
裏道はアイゼンを付けていても滑る。寒さと疲労蓄積と急坂、連日のトレッキング。
黄山は、並みの相手ではなかった。厳しかっただけに、思い出が強く残った。
ひとり旅。自分の姿は見られない。久楽^{くらく}も同じ場所にいた。絶景かな、絶景かな。
感動したものだ。ただ一枚の作品のためだけに。

二組のカップルも、感動と陶酔の時間、眼前の光景が終わるまで、
微動もせず、見つめていたのが、印象的だった。